



Title	原爆文学研究の現状と課題 : 東アジアという視座から
Author(s)	川口, 隆行
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 13-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68045">https://hdl.handle.net/11094/68045</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 原爆文学研究の現状と課題

## —東アジアという視座から—

川口 隆行

### はじめに

ここ大邱は、韓国初の原爆資料館がある陝川<sup>ハムギョ</sup>から近いだけではなく、北朝鮮のミサイルを迎撃するという THAAD ミサイルの基地がある星州<sup>ソンジウ</sup>からも遠くありません。最近、日本のテレビや新聞、週刊誌では、北朝鮮の核開発、ミサイル発射の文字を見ない日はありません。北朝鮮からミサイルが発射されるやいなや、J アラートなる全国緊急警報が各自自治体の防災無線を通して流されます。屋内退避を呼びかけ、電車の運行も停止するなど、いまにも北朝鮮のミサイルが落ちこちてくるといわんばかりです。私などは、日本上空 800 キロを通過し、2000 キロ離れた太平洋上めがけて発射されたミサイルよりも、世界各地で事故を繰り返しているアメリカ軍のオスプレイがいつ落ちてこないかと心配していますが、多く人はそうしたことには関心がなさそうです。また、先日インドを訪問した日本の首相は、その折、北朝鮮の核開発を厳しく非難しましたが、締結済みの「日印原子力協定」を強力に推進するとも明言しました。中国と対抗するためにインドと仲良くしたいのですが、インドが核兵器保有国であり、核兵器開発を推進する立場を捨てていない以上、矛盾した態度というほかありません。北朝鮮の核開発は問題ないというつもりはありませんが、冷静さを欠きながら北朝鮮の核の「脅威」を語ることで何か重大なことを見過ごしはしないか、そのほうが気になります。「脅威」を誰がどのように語るのか、それはどのような社会的働きをするのか。日本において北朝鮮の核の「脅威」は、朝鮮半島の危機として語られることはありません。つねに日本の危機として語られます。それは日本政府にとって政権を維持するために好都合に働くでしょうし、政府の主張を無批判に垂れ流すマスメディアも共犯者です。

私に与えられた役割は、ワークショップのテーマである「東アジア」という視座から「原爆文学研究の現状と課題」を報告することですので、これ以上、時事ネタを喋るのは慎みますが、こうした現在進行中の問題は、私の報告や今回のワークショップと関係ないことはありません。これはすでによくいわれていることですが、1945年8月6日の広島、9日の長崎の原爆体験とその記憶は、いわゆる「戦後」日本においてナショナル・アイデンティティを保証する集合的記憶として機能しました。「原爆文学」と呼ばれる文学ジャンルも

例外ではありません。一般に、日本で「原爆文学」といいますと、広島、長崎の出来事を描いた日本文学の特種なジャンルと見なされてきました。しかしそうした見方は、広島・長崎に限定された体験を描いた狭い範囲の「当事者」の文学として「原爆文学」を押し込めたばかりか、そこでいわれる原爆の悲惨さとは、多くの場合、「日本人」が経験した悲惨さとして理解されました。それは裏を返せば、「原爆文学」はもとより、原爆体験を学んだり、論じたりすることは、日本人以外の人々にとっては、あまり関心がない、意味が見いだせないことであったかもしれません。あるいは、「戦後」日本のナショナルな物語を拒絶するあまり（それも場合によっては理解できるのですが）、逆に別の排他的なナショナル・アイデンティティを立ち上げてきた場合もあるでしょう。

## 1. 原爆文学研究の歴史

日本における原爆や核に関する研究を便宜的に整理しますと、三つに大別できます。(1) 被爆者救済援護運動と結びつき展開した経験社会学的研究、(2) 原爆投下から現在の核問題、あるいは原発の導入から福島原発事故にいたる歴史的経緯を調査解明してきた国際政治学的研究、(3) 言説分析や表象分析に主眼をおいた文学や文化の研究です。(3)の核に関する文学や文化の研究には、映画や美術、ポピュラー・カルチャーなどさまざまな文化的表象も含まれますが、歴史的にいえばまずそれは「原爆文学」の研究から始まりました。

連合国軍による日本占領、東アジア冷戦の激化、そして朝鮮戦争が勃発する1940年代後半から50年代前半にかけて、広島や長崎の原爆の惨禍に遭遇した原民喜や大田洋子、栗原貞子、峠三吉、あるいは永井隆といった体験者が小説や詩、エッセイを書きはじめます。その後、1954年、アメリカの水爆実験でマグロ漁船が被害を蒙った「ビキニ事件」（第五福竜丸事件）をきっかけに、日本では原水爆禁止運動が国民的な盛り上がりを見せます。この時期にさきほど述べた小説家や詩人の作品を議論の対象とした小田切秀雄『原子力と文学』（講談社、1955年）が刊行されます。

60年代後半から70年代になると、子供時代に原爆を体験した林京子や中沢啓治が作品を書きはじめ、大江健三郎や井伏鱒二といった文壇の若手、重鎮であった非体験者による作品も多く登場するようになります。研究や批評においてとりわけ重要な仕事を残したのは、長岡弘芳という在野の文学史家・文献史家です。彼はベトナム戦争反対運動に参加しつつ、原爆文献の収集や原爆文学史の執筆といった活動に精力的に取り組みます。長岡は既存の文学史や雑誌特集、各種文学辞典に「原爆文学」という言葉がほとんど出てこないことを問題にし、『原爆文学史』（未来社、1973年）、『原爆民衆史』（未来社、1976年）、『原爆文献を読む』（三一書房、1982年）など、精力的に調査・研究を推し進め、広島や長崎の原爆体験に由来する膨大な作品群を、一つのジャンルとして眺め、批評する視座を提供します。

80年代前半には、アメリカのレーガン大統領が唱えた限定核戦争論やNATO（北大西洋条

約機構)への核配備によってヨーロッパ、アメリカなどで新たな反核運動が起きますが、日本も同様でした。長岡はこの時期、『日本の原爆文学』全15巻(ほるぶ社、1983年)の実質的な編集責任者として刊行に尽力します。これは現在にいたるまで「原爆文学」と銘打った唯一の全集であり、「原爆文学」の体系化と普及に大きく寄与します。それは、黒古一夫やアメリカの日本文学研究者ジョン・W・トリートによる作品研究へとつながります。

## 2. 原爆文学研究の現状と課題

一方、言語論的転回を経た80年代の文化思想や批評理論は、新たな研究動向を生み出しました。文化人類学の立場から核のカタストロフの語られ方を論じた、米山リサ『広島 記憶のポリティクス』(岩波書店、2005年。原著1999年)はその代表でしょう。米山は、冷戦期の「大きな物語(マスターナラティブ)」に依拠することで、次第に指示内容を狭めて陳腐な記号となった「ヒロシマ」に、多元的な意味を求める多様な動きとそれを封じこめようとする力のせめぎあいを読み込みます。また、小沢節子『「原爆の図」 描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』(岩波書店、2002年)は、知名度の割には反戦平和のプロパガンダとのみ理解され、美術史において正当な位置づけがなされなかった丸木位里・俊「原爆の図」をとりあげ、その生成のプロセスを探るとともに、絵画としての表現の可能性とその社会的な働きを解明しようとしていました。

彼女たちの研究は、狭義の文学研究とは別に出自があるのですが、文学研究もこうした動向と無縁ではありませんでした。2001年に当時九州大学教員であった花田俊典の呼びかけで原爆文学研究会が発足、翌年には機関誌『原爆文学研究』が創刊されます。今回このワークショップに日本から参加しているメンバーの多くが関わりを持つ研究会です(台湾から参加している李文茹さんもその一員です)。もちろん同じ研究会のメンバーといっても興味・関心はそれぞれ違うので、ひとまとめにいうことはできませんが、あえて大枠としていえば、長岡らの学恩に畏敬の念を払いつつ、彼らがジャンル化した「原爆文学」という枠組自体を再検討しながら、さまざまな作品や事象を論じてきたといえるでしょう。

核・原爆の表象は、すべての表象がそうであるように、生産や受容の様態を含む社会的文化的関係性(=表象システム)の中で表出されます。国民国家は、社会的文化的関係性(=表象システム)を通して国民意識を喚起します。「原爆文学」もその例外ではありません。そういう点からいえば、「原爆文学」という文学ジャンルは、典型的な原爆物語の生成と受容、批評的な言説実践の軌跡そのものといえるでしょう。もうすこし簡単にいえば、「原爆文学」とは、ナショナルな原爆物語を強化することもあれば、それを批判的に捉えかえずものでもあるわけです。私個人は、2008年に『原爆文学という問題領域』(創言社)という本を発表しました。議論の対象を小説、詩、評論はもとよりマンガ、慰霊碑碑文、証言集にまで広げながら、「原爆文学」を実体的、固定的に捉えるのではなく、錯綜した声のせめ

ぎ合いが継続される記憶と生存の場と位置づけました。また、山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945 - 1960』(人文書院, 2012年)、中尾麻伊香『核の誘惑—戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現—』(勁草書房, 2015年)といった狭義の文学に収まらない、多様な核の文化表象を論じた新しい世代の研究も登場しています。

今回のワークショップのテーマである「東アジア」という点からいえば、第2部のディスカッサントでもある村上陽子さんの『出来事の残響—原爆文学と沖縄文学—』(インパクト出版会, 2015年)が重要になります。村上さんは、「原爆文学」と「沖縄文学」という異なる文脈から生み出された二つの文学ジャンルを論じていますが、単純な共通性を見出したり、同一の枠組に回収しようとしたりはしません。それぞれの文学ジャンルが関わってきた集合的記憶から零れ落ちる出来事の記憶を、それぞれの領域の作品から丹念に拾い上げようとしています。

今回のワークショップのために村上さんの本を再読しながら考えたことをいえば、たとえば「原爆文学」と「在日朝鮮人文学」、「原爆文学」と「朝鮮戦争文学」、あるいは「原爆文学」と「4・3事件文学」といった議論を立てることは意味があるのかなのかということがあります。そもそも「朝鮮戦争文学」とか「4・3事件文学」とかがジャンルとして成立しているのかどうかさえ不勉強で知らないのですが、おそらく韓国には韓国のナショナル・アイデンティティ、集合的記憶と関わる文学があるでしょう。文学史や文学作品、批評や研究は個別のさまざまな体験を集合的記憶として方向づけもしますが、そのことで何が忘却されたのか。あるいは、そうした集合的記憶にどのように介入したのか(しえなかったのか)。異なる言語や地域で書かれ、まずは読まれた異なる文学(ジャンル)を同じ枠組に性急に回収するのではなく、たがいをつきあわせながら読みなおすことで、それぞれが抱える固有の問題と共通する課題が見えるかもしれません。もちろんこれは日本と韓国に関わることだけではなく、さまざまな国や地域の文学や社会の問題へと展開することが出来るでしょう。そうした議論を積み重ねることで、「東アジア」のさまざまな「戦後」、冷戦期からポスト冷戦期の経験を捉え返すことが可能になるのではないのでしょうか。

繰り返しになりますが、「原爆文学」というジャンルが生成し、受容され、批評される社会文化的関係性(=表象システム)を問うことは、「戦後」日本で語られた広島、長崎の記憶、国民的な原爆物語を問題化することだとして、アメリカにはアメリカの原爆物語があるし、中国には中国の原爆物語があります。国や地域によっては、原爆を語らないという物語もあるでしょう。「戦後」日本の国民意識と深く関わった日本語で書かれた「原爆文学」を論じるためにも、日本国内あるいは日本語で書かれたテキストに議論を限定することなく、さまざまな言語や地域で生み出された核の表象や言説にも目配りする必要があるでしょう。先日、ここ数年の共同研究の成果として、『〈原爆〉を読む文化事典』(青弓社, 2017年)という編著を刊行しました。やはり今回日本から参加しているメンバーの多くに協力してもらった仕事です。日本語で書かれた「原爆文学」に直接かかわることだけではなく、たとえ

ば「アメリカの大衆文化と「核の神話」」、「台湾民主化と反核」、「先住民権利運動」、そして「朝鮮半島と核危機」といった項目も意識的に設定しました。「朝鮮半島と核危機」を担当したのは本日もここに参加されている高榮蘭さんです。現在進行中でもあるこの問題をまとめるのは大変なことだと思われませんが、すばらしい整理をしていただきました。高さんは、「北朝鮮での文学言語には、原爆への恐怖が潜在化」しており、それは「ヒロシマ・ナガサキではなく、朝鮮戦争のときの記憶、すなわちアメリカによる激しい空爆と核の脅威にさらされた」ことによると述べています。また、アメリカの「核の傘」のもとにある韓国では、核という言葉は、「日本帝国を「無条件降伏」させ、「朝鮮半島」から日帝（日本帝国主義）を追い出した武器」であるとともに「アメリカ占領軍の否定的な権力の表象」といった具合に、分裂的に使用されているとも述べています。さらに重要なのは、「南と北が核危機の起源として朝鮮戦争を位置づけることによって、ヒロシマ・ナガサキで被爆した朝鮮人の問題が後景に追いやられてしまう」とも述べています。高さんの指摘は、「原爆文学」と「朝鮮戦争文学」をつきあわせてみたらどうかというさきほどの提案とも通じる点があるかもしれません。

### 3. 東アジアから栗原貞子「ヒロシマというとき」を読みなおす

最後に少しだけ、「東アジアから原爆文学を読みなおす」というテーマを掲げたワークショップですので、具体的な作品の一つ紹介したいと思います。栗原貞子「ヒロシマというとき」（1972年）という詩です。

〈ヒロシマ〉というとき／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくこたえてくれるだろうか  
／〈ヒロシマ〉といえば〈パール・ハーバー〉／〈ヒロシマ〉といえば〈南京虐殺〉  
／〈ヒロシマ〉といえば 女や子供を／壕のなかにとじこめ／ガソリンをかけて焼いた  
マニラの火刑／〈ヒロシマ〉といえば／血と炎のこだまが 返って来るのだ

〈ヒロシマ〉といえば／〈ああ ヒロシマ〉とやさしくは／返ってこない／アジアの  
国々の死者たちや無告の民が／いっせいに犯されたものの怒りを／噴き出すのだ／  
〈ヒロシマ〉といえば／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくかえってくるためには／捨てた  
た筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばなら  
ない／その日までヒロシマは／残酷と不信のながい都市だ／私たちは潜在する放射能  
に／灼かれるバリアだ

〈ヒロシマ〉といえば／〈ああ ヒロシマ〉と／やさしいこたえがかえって来るた  
めには／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない

この詩は、アメリカ人や日本人以外のアジアの人々にとって、「ヒロシマ」という言葉が普遍的な暴力の象徴ではなく、日本の加害性を想起させるものであることを問題にしています。栗原貞子という詩人は、先にも触れましたが広島で被爆し、戦後すぐにその体験を詩にしています。60年代後半から70年代前半にかけては、長岡弘芳同様にベトナム反戦運動に参加、その活動を通して日本のアジアに対する加害者性を認識したといわれています。「ヒロシマというとき」はそれを詩にした彼女の代表作の一つです。

私もこの詩を高く評価するものですが、同時にさまざまな問いを発しているようにも思います。「ヒロシマというとき」については先に紹介した私の単著でも論じていますので、そこで触れなかった「〈ああ ヒロシマ〉と／やさしくかえってくるためには／捨てた筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばならない」というフレーズについて思うことを簡単にお話しします。このフレーズは、日本国憲法第9条で戦争放棄を明記しながら、広大な米軍基地と米国の「核の傘」に守られた「戦後」日本の平和主義の矛盾を指摘しています。また、現在にいたるまで圧倒的な米軍基地を押しつけられている沖縄の状況を問題にしているとも読めそうです。ベトナム戦争時、沖縄は米軍の重要な戦略拠点でした。この詩が書かれたのは沖縄が日本に「復帰」した72年です。

一方、この詩には「異国の基地」はありますが、「自国の基地」すなわち自衛隊の存在は語られていません。不戦の誓いを徹底しようとするならば、それと自衛隊の存在との整合性を問うことは避けて通れないはずです。また、沖縄の日本「復帰」は、日本のマジョリティにとって、日本と沖縄の歴史的不均衡を是正するというよりも、アメリカに奪われた領土を回復するというナショナルな欲望に力点がありました。この点において、「ヒロシマというとき」という詩は、沖縄の置かれた状況を問題にしようとしながらも、実のところ日本のマジョリティの欲望と微妙な共犯関係にあるという解釈も成り立ちそうです。あるいは、そうした日本人のナショナルな欲望からこの詩を解放するためにも、米軍基地の経験沖縄(≒日本)の問題としてだけでなく、韓国やフィリピンなどの経験へとより積極的につなげる想像力も必要かもしれません。

実をいえば、こうした読みが最初に浮かんだのは、私が2000年代に7年ほど働いていた台湾の大学の授業を通してでした。この詩を学生たちと読んでいた時、ある男子学生が「米軍基地はいらないけど、自国を守る軍隊は必要だ」といった発言をしたのです。韓国同様、徴兵制が存在する台湾では、軍隊に入るということは、良くも悪くも彼らにとって切実な問題です。台湾の学生からヒントを得た私の読みが、正しいのか間違っているのかはわかりませんが、「東アジアから原爆文学を読む」ということは、こうしたさまざまな立場からの解釈を重ねながら、自動化された読みを問い直し、ナショナルな物語としての「原爆文学」を、多くの人々の共有財産にしていくことではないでしょうか。今回のワークショップもそうした試みの第一歩となればと考えています。ご清聴ありがとうございました。